

ある一族、ボーダーへ

千紫万紅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いくつもの惑星国家が存在する夜の暗黒。

その惑星国家の中に存在する1つの乱星国家、その国家には住民はおらず、50を超える侍女と7人の家族が住んでいる。

7人はそれぞれが異常なほどの戦闘力、トリオンを有し、気の向くままに接近した星を滅ぼした。

ある戦いである兵士がその乱星国家の主に尋ねたそうなの

「貴様らは一体何なんだ！」

すると、主は軽く笑いこう答えた。

「うち等は星喰いの一族やよ」

そしてその一族に新しい命が生まれようとしていた。

目次

| | |
|-----------------|----|
| キャラ設定 随時キャラ設定追加 | 1 |
| プロローグ 1 | 4 |
| プロローグ 2 | 9 |
| プロローグ 3 | 16 |
| 少女、玄界に行く…はず | 21 |
| 少女、玄界に降り立ち一騒動 | 28 |

キャラ設定 随時キャラ設定追加

キャラ設定

主人公

炎花・アポカリプス 性別 女

アタッカー

PARAMEETER

トリオン： 38 (51) (76)

攻撃： 13 (35) (40)

防御・援護： 9 (14) (25)

機動： 11 (11) (23)

技術： 14 (15) (14)

射程： 4 (6) (23)

指揮： 4 (4) (2)

特殊戦術： 8 (9) (8)

トータル： 101 (145※1) (207※2)

(※1) 巨大鉤爪型黒トリガー黒桜&白桜

(※2) 搭乗型トリオン機体 RS (Reaper Squad) (モデルはACFA ホワイト・グリント 塗装は死神部隊塗装)

トリガー

メイン・スコープオン シールド グラスホッパー バックワーム

サブ・スコープオン シールド グラスホッパー スパイダー

黒トリガー・黒桜&白桜

搭乗型黒トリガー・RS

容姿は雪の様に白い肌、黒髪、そして血の様に赤い目が特徴。

年齢： 15 (1)

好きなもの： 家族 食事 戦闘

サイドエフェクト： 直感

乱星国家「星喰いの一族」の末娘。

母の血から創りだされたが、母が材料となる自身の血を考え事をしてきた為に本来、必要な量を大幅にオーバーして生まれた。

大の家族っ子で家族を侮辱されると静かにキレる。

生まれて一年目で母達から戦い方を教わり1歳の誕生日に貰った黒トリガーで近くにあった星を1人で破壊した。

玄界には旅行で来たが、その時に近界民の侵攻があり旅行を邪魔されたことで近くにあったボーダーに入隊し近界民と戦うことになった。

性格は面白ければ何でも良い楽観主義で、容赦なく慈悲がない。

初めて会う人に対しては心を開きにくいだが、一度開くと積極的に構ってもらいに行く。

ちなみに星喰い達は輸送船が無くても、惑星国家が自分達の星の圏内に入ると、空間をたたき割って星に移動することが可能。

星喰いの姉達は、それぞれ違う惑星に行っているがその国の輸送船で国を跨ぐことが多々ある。

アモン 女

PARAMETER

トリオン： 31 (45)

攻撃： 10 (17)

防御・援護： 6 (7)

機動： 10 (14)

技術： 12 (16)

射程： 5 (10)

指揮： 4 (4)

特殊戦術： 2 (8)

トータル： 80 (121*1)

(*1) 黒トリガーの数値

使用トリガー： 非公開

アスタロト 女

PARAMETER

トリオン・・・ 27 (40)

攻撃・・・ 4 (13)

防御・援護・・・ 13 (29)

機動・・・ 5 (7)

技術・・・ 13 (15)

射程・・・ 8 (11)

指揮・・・ 1 (1)

特殊戦術・・・ 9 (6)

トータル・・・ 85 (122*1)

(*1) 黒トリガーの数値

使用トリガー・・・ 非公開

登場惑星国家

中立国家 基本的に戦争に関与せず、どの国家に対しても中立を保つ。

・セルバ

軍事国家 戦争を積極的に引き起こす弱肉強食の国家で、強いものほど強い権力を有する。

・タイラント

プロローグ1

気がつくとも私は水の中に居た。

とても澄んでいて、外の景色も見えるけど私の意識がはっきりしないのか、周りはぼやけていた。

ぼやけた視界で辺りを見回してみると、私は暗い部屋で円柱状の力プセルに入っていることがわかった。

ふと私が正面を見ると、さっきまで誰もいなかったのに女の人を立てて私のことをずっと見ている様な気がした。

私は、今この状況にぼやけた頭だがとても不安を覚えると同時に、とても安心できるような錯覚に陥った。

安心できる感覚は、目の前の女の人を見ている時だけだった。

私が女の人を見て、少しでもこの不安をぬぐい去ろうとしていた時、私は急激な眠気に襲われ抵抗することもままならないまま、意識は闇へと消えていった。

何分、何時間、もしかしたら何日何カ月単位で寝ていたかもしれない眠りから私は目覚めた。

しかし、私の意識の覚醒は平凡なものではなかった。

私は身体に違和感を感じ、自分の体を見ると、私の体にはいくつもの管が取り付けられていた。

管からは絶えず私の身体に何かが投与されていたが、すぐに死なないことから毒物の類であることは否定された。

私は動かせぬ身体を動かすのを諦め、正面を見るとまたあの女の人を立てていた。

前回よりもぼやけた視界はマシになっており、女の人の顔は何故かぼやけていたが、女の人の頬を伝いこぼれていく雫ははつきりと見ることが出来た。

それを見ることが出来たと同時に私の意識はまた、闇へと消えて

いった。

次に起きた時、私はカプセルではなく診察台のような場所に寝かされていた。

私の周りを引つ切り無しに多くの人が駆け回っているのが見えた。

「意……た！です……血……せん！」

「戻……！……対に……！……故……！」

「この……では……ん……す！」

「ええい！そ……はわ……る！何……だ！意………てきて……

ず………や血………昇し……！」

大きな声のはずなのに、とところどころ聞き取れない。

私の身体はどうなったの？あなた達は誰？あの人はどこ？

そんな考えばかりが頭の中をぐるぐるとまわっている。

もうあの女の人を見ることが出来ない？そんなの嫌だ……嫌だ！

「心肺と血圧が上昇し始めました！こんな事があり得るんですか

?!」

「どうしたんだ！」

「トリオン外部供給機の中に溜めてあったトリオンがすべて吸収さ

れました！」

「何だ?!?まったく！これだから異常個体イレギュラーは！仕方ない……ありつ

たけの供給機を接続しろ！最悪すべてなくなってもかまわん！また

他から取ってくればいい！」

「「「わかりました！」」」

「これから最終調整だからな。これ以上何も起きないでくれよ？」

今度ははつきりと周りの音を聞きとることが出来た。

だが、呼吸器から気体を送られてくるとたちまちに意識が遠のき、

また闇へと消えていった。

「私… 花、そろ…さい」

私を呼ぶ声がすぐ耳元で聞こえてくる。

何故呼ばれているのが私とわかったのかという疑問は尽きないが、考えても答えなど出る訳もなくあっさり私は考えることを放棄し、重い瞼を開けると目の前にカプセルから私を見ていた女性の顔が、私のすぐ目の前にあった。

「…誰？」

「ねぼすけさんやねえ。うちは災花ちゃんのお母さんやよ」

「お母さん…？」

「そうやよ、それにしてもうちに似て、かいらし顔やわあ」

母はそう言くと、私の顔と髪を何度も撫でてくれた。

私を撫でてくれるたびに、母の匂いが感じられた。

「起きたばかりでかんにんしてな？これから災花ちゃんを鍛えるんよ」

「うん、大丈夫」

「おもに受ける訓練は、戦闘訓練、座学、そんで体力づくりやからおきばりんさい」

私はその日から1年間、みっちり訓練を受けさせられた。

母が親身になって教えてくれるから、私も精一杯がんばった。

訓練の過程で知ったのだが、どうやら私は他の姉達よりもすべての能力が抜き出ており訓練するたびに強くなっていく私を見て母はとても嬉しいようだ。

私の体は15歳をベースにされているが、どうやら15歳での平均身長よりも小さいようで、母も心配していたが私は私なりに小さい身長でも戦える力を身に付けた。

そして1年が経過し、一回目の私の誕生日に近付いたところで母か

ら訓練の最終テストとして近くに接近してくる国をメイドを連れて計3人でマザーを破壊してきなさいというものだった。

「災花ちゃん、紹介しますえ？こっちの紅い髪がアモン、こっちの白い髪がアスタロト、仲ようしたってな？」

「ご紹介にあずかりました。アモンです。勿論女です。そしてこっちのおっとりしたのが」

「アスタロトです！よろしく頼みます！」

2人ともないすばでーで私はまっ平ら。

アモンはアスタロトの自己紹介が終わると、アスタロトの服をひっぱって隣の部屋に行ってしまった。

隣の部屋から何かで叩く音と鈍い音がし、時折何かが飛び散る音が聞こえるのは気のせいだろう。

しばらくすると、2人とも戻ってきた。アスタロトだけゲツソリしていたが…。

「ほんならアモン、アスタロト、災花ちゃん任せるなあ」

「承りました。私アモン、精一杯頑張らせていただきます」

「わかりました！がんばります！」

「そうそう災花ちゃん、1回目のおめでどうやらかうちからプレゼントがあるんよ」

そう言っ母は、自分の胸の谷間に手を入れ小さな箱を取り出した。

私はその様子を見て黄昏ていると、アモンとアスタロトから「これから大きくなりますよ」「まだ一年なら希望はありますよ！」とフオローを入れてくれたが、持っている者から言われても余計むなしくなるだけなんだよ。

「災花、お誕生日おめでどうやわあ。これは災花ちゃんの武器やから大切に扱ってえな」

そういって母は箱から黒い腕輪を取り出し私の腕に嵌めてくれた。

「ありがとうお母さん！大切にするね！」

「災花ちゃんは短剣の使い方も上手やったけど、鉤爪クローの扱いが一番上手やったから鉤爪型のを贈らせてもらったんよ。戦闘で役立つ

てえな」

「私がんばる！」

私はアモンとアスタロトを連れて家の玄関まで行き、教えてもらった通りに空間に向けて拳を振るう。

すると、空間にひびが入りその作業を何度か続けると私の身長を超え2人が通れるくらいの大きさの穴が出来た。

穴の向こうには、砂漠が広がっており近くの惑星国家とつながったとわかる。

「今回炎花ちゃんが行く国は砂漠の国エリモス。あんまり強い国でも無いから物足りんと思うかもしれないけど、油断せずにきばりんさい」

「わかった！」

私は勢いよく穴へと飛び込み砂の国エリモスを星を喰う為の戦いを開始した。

プロローグ2

「暑い……」

砂漠の国に降り立った私を待っていたのは、灼熱地獄と大差ない砂漠の熱気だった。

私はあまりの暑さに、日傘をアモンにさしてもらっても汗が止まらない。

しかし、私とは反面にアモンとアスタロトは涼しい顔をして汗ひとつかいていない。

「なんで2人とも汗かいてないの……」

「鍛えておりますので」

「それはですね。長生きしているとこんな砂漠がある国にも攻めることがあるんですよ。それを何回か繰り返せば自然と慣れてきましたね」

「長生きって……2人とも何歳なの？」

「私は忘れましたが、アモンは確か今年でごひや「殺す！」熱い熱いですって！洒落になってませんよ！ジョーク！お茶目なジョーク！！」

余計なことを言ったアスタロトは、アモンに頭を掴まれ熱い砂漠に頬を押し付けられています。

私はこの時、年齢の話は絶対にしないと心に誓いました。

しばらくして、アスタロトのお仕置きが終わると、アスタロトの頬は赤くなっており痛そうに頬をさすっていたが、すぐに赤みが引いていき、いつも通りの肌色になっていた。

「アスタロト治り早くない？」

「折檻の受け過ぎで、治癒能力は高いんですよ。いやー、私じゃないかったら死んでますね」

「アスタロト、今度は頭を砂漠に埋めてほしいようね？」

「冗談！冗談ですって！」

そんなアモンとアスタロトの夫婦漫才を観賞しながらしばらく歩くと、壁らしきものが遠目で見えてきたがアスタロトが私の前に手を

出し私を制止させる。

アスタロトは遠目に見える壁を睨みつけている。

「アスタロトが目が良いのは知ってるけど、この距離で見えるものなの？」

「彼女の視力は両目とも5.0なので、この位置からでもはつきり壁が見えているのではないですか？」

「お嬢様、どうやら先客がいたようですよ」

「え?!」

アスタロトのいきなりの発言に驚きながらよく目を凝らして遠くにうっすらみえる壁を見るのがどうなっているのか全く分からない。

アモンに関しては見えないことがわかっているのか、戦闘態勢に入れるよう準備をしている。

「とりあえず、あそこまで行ってみようよ」

「そうですね。微妙に煙が新たに上がっているのが気になるんですけど、まあ敵は全部排除すれば解決ですね」

「アスタロト、慢心しているのなら後ろから刺しますよ？」

「まじめにやりまーすー!」

仲良いな。

そんなことを考えながら、全速力で壁に向かって走る。

私が本気で走っても大体60km/Hしか出ないのに対し、アモンとアスタロトは私以上に早く走ることが出来る。

年を重ねるごとに強くなっていくのが星喰いの特徴なので、私もまだ強くなる余地があるということでの不満たらたらな心を落ち着ける。

大体30分ほど走り続けると、壁が徐々に近づくにつれ大きくなっていく。

壁のすぐ近くまで来ると、壁の中では未だに戦闘が続いているのか爆発音やいろいろな音が聞こえてくる。

私は初めての実践がすぐ手を伸ばせば届く距離にあると思うと、そ

ろそろ我慢の限界が近い。

「お嬢様、作戦はどうなさいますか？」

「攻撃する奴は…全部殺す！」

「承りました」

私達3人はそれぞれの黒いトリガーを取り出し、装備する。

「起動」

私がそうつぶやくと、腕輪が反応し両手に大きな鉤爪型のトリガーが装備される。

鉤爪の大きさは、私よりも大きく重いが全然扱える。

このトリガー専用の能力もその使い方も頭に入ってきた。

アモン達も既に戦える状態なので、私は右手の鉤爪「黒桜」の手のひらを壁に当てて能力発動のキーワードを口にする。

「ブラスト！」

ドガアツ!!

すると、壁に直径3mほどの穴が開き壁の内側で戦闘をしていた人たちが一斉にこちらを向く。

勢力的には、この国の兵士たちが圧倒的不利に立たされているようで、この国のものではないであろうトリオン兵が大量にいた。

おもに、バンダーとモールモッドが多数とバムスターが5体ほどいる。

経験が少ないのか訓練が足りてないのかは知らないが、明らかにこの国の兵士は弱い。

トリオン兵は多いが、敵の近界民は3人しかいない。

「アモン、アスタロト、この国に攻めてきた敵を殺るよ」

「好き勝手やるよー！」

「それではお嬢様、ぐ武運を」

2人はそう言うそれぞれの方角に向かって走って行き、戦闘を開始する。

「さてと、死にたい人から向かってきてくださいねー」

「こんなところに来て、そんなこと言うなんてよっほど死にたいらしいなー！」

3人ほど、自分の戦っていた人たちを軽く倒し私の方に向かってきた。

まあ、こつちに来るまでに何もしいとは行っていないんですけどねー。

私は左手の「白桜」の手のひらを相手の方向に向け、黒桜と同じようにキーワードを行って能力を発動する。

「炸裂誘導弾！」

すると、いくつもの光の線が出現し敵ABCに向かって飛んでいく。

「こんなもんに当たるかよドドドン！」

敵Aが難なく避けたトマホークは軌道を切り替え、背後から敵Aの身体に着弾し炸裂していく。

その時に少々威力が強すぎたのか、トリオン切れで生身になってからもトマホークが降り注ぎ、爆発の煙幕が晴れるときには既に敵Aはただの肉塊になっていた。

「てめえー！よくも仲間を！」

「そんなこと言われても私だって使うの初めてなんだからなにが起るかなんて知らないよ」

私が呆れたように言い放つと、敵Bはキレたようで突っ込んできた。

「てめえも同じように肉塊にしてやるよ！」

「愚直だー」

私はタイミングよく、飛び込んできた男を黒桜で捕まえる。

掴まれた敵Bは首だけを出した状態で喚き始める。

「俺らがどこの国の者かわかってやってんだろうな！俺たちはタイラントだぞ!!」

「そんな国知らん。あと上から話しすぎね？」

「軍事国家タイラントをしらねえだど!?てめえどこの国だ！」

「私の居る国に名前なんて無いと思うけど?いろんな国からは星喰いって言われるけど」

「なっ！星喰いだど?!伝説上の存在じゃないのか?!」

私が星喰いだと言うと、周りの人たちが騒ぎだし蜘蛛の子を散らすように一斉に逃げ始める。

捕まえた男も逃げようと必死で逃げようとしているのか、もぞもぞと動いている。

「悪かった！俺が悪かったから助けてくれ！お前に手は出さないから！」

「じゃあ良いよ」

「ふう…助かった」

男が安堵したところに私はキーワードを口にする。

「圧壊」

そう言うのと男の体が急に弾け飛び、生身の男が出てきた。

男は何が起こったのかわからない様子で私を見てくる。

だから、私はもう一度キーワードを口にした。

「圧壊」

「待つグシャッー」

男は私の手の中で弾け飛んだ。

返り血が辺りに飛び散り、私にもかかった。

敵Cがその様子を振り返りざまに見ていたが、引き返すことも無くどこかへ行ってしまった。

恐らくだが、輸送船のある場所まで戻ったのだろう。

「うわっ、黒桜汚れちゃった。白桜の能力もう1つあるから試したかったのに逃げちゃったからどうしようかな」

私が黒桜に付着した臓物を落としていると、すごい勢いでモールモッドとバンダーがこちらに向かってきた。

私は爪の部分に向かってくるモールモッドに向け、能力ではないが機構の1つを使用する。

「射出」

すると、鎖の付いた爪がモールモッドに飛んでいき弱点の目に突き刺さる。

私は手を横なぎに払い、死んだモールモッドで向かってくるモールモッドを薙ぎ払っていく。

モールモッドが面白いくらい簡単に吹き飛んでいく。

爪が折れたもの、目が壊れたもの、足が無くなったもの、一度の薙ぎ払いで多くのモールモッドを戦闘不能に追い込むことが出来た。

私は、爪からモールモッドを外し爪を元に戻す。

モールモッドを全滅させ、今度はバンダーで遊ぼうと思えばバンダーを見ると、浮遊する物体がバンダーを解体していた。

「アスタロト！私が遊ぼうと思っていたバンダー取らないですよ！」

「え!?すみませーん!!」

私が叫ぶと、同じように謝罪の言葉が返ってきた。

浮遊するする物体、アレはアスタロトの黒トリガーで
「フロートイングシールド浮遊する盾」。

形状を好きなように変えることが出来、他のメイド達からはファネルやシールドビードと言われている。

アレの嫌らしいところは、全部アスタロトの思考にタイムラグ無しに動かせることだ。

「すみませんお嬢様、流石にキツイかなと思いましたが」

いつの間にかアスタロトがこちらに戻って来ていた。

「今度はちゃんと聞いてよ?じゃないとアモンに言いつけるからね!」

「ほんと気をつけますから良いつけだけは勘弁してください!あの人腕細いのに怪力なんですよ!怪力女ですよ!」

「あ」

私は絶句してしまった。

アスタロトの後ろで、笑顔のまま額と手に青筋を浮かべたアモンが立っていたからだ。

「お嬢様どうしたんですか?そんな終末でも見たような顔をして」

「アスタロト、ご愁傷さま!」

「ええー!どうしたんですかあああ!?!」

「アスタロト、殺すぞ?」
??!?!?!

私が折檻されることは無いが、ちよつと見たくないので敵Cが逃げ

た方向へ私は走った。

後ろから阿鼻叫喚の音が聞こえたが、気にせず走った。途中バムスターの死骸を見つけたが、気にせず走った。少し走ると、輸送船があったであろう場所に到着した。

輸送船は無かったため、私は本来の目的であるマザートリガーのためアモン達の元へと戻る。

実際戻りたくないが…。

結局仕方ないので戻ったが、案の定アスタロトが見せられないよ状態だった。

「アモン、やり過ぎじゃない？」

「これくらいで良いのですよお嬢様」

「酷いですよお嬢様… いるならいるって言うてくださいよ…。」

「まあほっとけば治るから良いか」

5分ほど待つと、アスタロトは元に戻ったのでマザートリガーがあるであろう街の中央にある城に向かうことにした。

プロローグ3

「これで大丈夫だよ。でも応急処置だからちゃんと医者に行つてね？」

「ありがとうございます」

私たちは、先ほどの戦闘で出たであろう負傷者を見つけたのでついでに手当をしながら城に向かっている。

アモンもアスタロトもわたしのすることに賛成してくれている。しかし全く奇妙なものである。

侵略しに来た国はすでに攻撃を受けておりそれに介入する形で私たちが侵略。

私たちも侵略するためにマザートリガーのある城に向かっているのだが、私たちの戦闘で出た負傷者を放置するのも後味が悪いので、こうして負傷者を見つけては手当をしているのだ。

「とうか、アモンはよく応急処置の道具を持ってたよね」

「戦闘で破壊された道具屋からpak... もらってきました」

「それだめだよね?!」

「潰れた道具屋を漁ってたのはそういうことなんですか」

「アスタロトも見てたのなら止めようよ！」

「お嬢様、この世にはこんな諺があります」

「絶対ろくでもないと思うけど一応聞くとよ」

「二度地面に落ちたものは地に帰ったので拾った者のものです」

そんな自信ありげな顔をされても悪いことは悪い。

小さいころからずっと思っていたが、アモンは時たま変なことを言う。

ただで持つてくるのは悪いことだとお母さんが言っていたので、とりあえず後で道具屋の人に謝っておこうと思う。

しばらく歩くと、城の入り口の門前まで来た。

「砂漠の国なのに意外に大きいね」

「国の主の住処が大きいければ大きいほど国民からの信頼が厚いか、圧政を強いているかです」

「でもさつき兵士はお城ににげていきつたので、信頼は厚いようですわね！」

私的には国民から慕われているのに国を滅ぼすのはあんまり気が進まない。

門前には門番はおらず、簡単に城の中に入れた。

そして、城内に入っても人は全くおらず静まり返っている。

「国を捨てて逃げたのでしょうか？」

「うーん、とりあえず警戒はしておいて城内を探索しよう」

「敵は見つけたら倒していいですよわね？」

「せめて捕獲して」

私たちは一つ一つ部屋を調べていったが結局誰とも出会わなかった。

途中、アスタロトがアモンに対して数回悪戯をしていたが、すべて躲され折檻された。

「残るはこの部屋だけですけど、中から人の気配が大量にします」

「見取り図によると、その部屋は王の間ってなってますよ」

「私が先に入るから2人とも私の後ろで待機しててね？」

「お嬢様、危険すぎます」

「まあまあ先輩は過保護すぎですよ。たまには無茶もさせてあげましょうよ」

珍しくアスタロトがまともな意見を言ってることにアモンは顔をしかめながらも、私が部屋に先に入ること了承してくれた。

部屋に入ると、部屋には傷ついた兵士や国民が大量に居た。

辺りを見回していると、1人の少女が私のほうに近づいて来る。

少女は、薄黄色の髪に黒い瞳を持ち服装は体のラインが出る服を着ている。

「初めまして。わたくし私は砂の国第一王女アイリス・エリモスと申します。父と母は現在侵略を受けた影響で負傷したので代理として私が参りました」

「私は焔花・アポカリプス。一応この星の侵略者かな？」

「ええ、存じております。この度は襲われている国民や兵士を助け
ていただいてありがとうございます。」

「私たちも侵略者つてことわかってる？」

「わかっております。お願いですからマザートリガーを破壊しない
てくださいい！」

そんなことを言われても私たちは侵略者。

できれば私も弱った星を破壊するのは、気が引ける。

「アモン、アスタロト、相手の王女さんやめてほしそなんだけど」

「こればかりは仕方ないです。弱いのが悪いのです」

「確かに同情はしますけどね」

「お母さんに聞いて従属させちやダメかな？」

私が2人に聞くと、二人とも「あー…」というような顔をした。

確かにお母さんが言ったのは「破壊」だが、お母さんは気まぐれな
ので頼めば破壊から変わるかもしれない。

「アモンかアスタロト、お母さんに連絡取れる？」

「二応アスタロトがメッセンジャートリガーを持っていますが」

「アスタロト、そのトリガー貸して」

「いいですよ」

メッセンジャートリガー

起動し、伝言を伝えると伝えたい人にまで空間跳躍する。

必要なトリオン量は文字数に比例して大きくなる。

私はアスタロトからメッセンジャートリガーを受け取り、お母さん
に対しメッセンジャーを入れトリガーを起動させるとトリガーが手元か
ら消える。

「あの…何をしているんですか？」

「ちよつと黙つてて。メッセージ待つてるんだから」

私が突っぱねるように答えるとアイリスはシユンと落ち込んで部屋隅に行き、ブツブツと独り言を言いながら床に「の」の字を書き始めた。

その様子を見てアモンは汚物を見るような顔でアイリスを見、アスタロトは苦笑している。

しばらくいいじけるアイリスの様子を見てみると、手元にメッセンジャートリガーが返ってきた。

メッセージの内容は、従属させることを了承するもので、星自体がひどいものなら技術者を送ってくれるとのことだった。

私は初めてお母さんが気まぐれな人で良かったと安堵した。

「星は破壊しません。その代わりに私たち一族へ従属してもらいますけどいいですか？」

「どうせ私なんていろいろ頑張ってきましたけど砂漠ばかりで作物のさの字も無く慕ってくれる国民を飢えさせてばかりで役に立たないですよ… 挙句他の惑星から攻められて結局マザートリガーが破壊されちゃうんですよフフフ」

「なんか王女さん暗黒面に堕ちようとしてない？」

暗黒面に堕ちそうになっていたアイリスをアモンが叩いて引き戻し、破壊しないことを伝え代わりに従属を提案したら破壊されるよりはマシと言い、従属を了承した。

その後、門から技術班と医療班、合わせて計10名がお母さんから送られてきた。

アイリスは両親に従属したことを報告しに行き、両親からは仕方なかったがこれからも頑張っていこうと決めたようだ。

送られてきた技術班のメイドたちはまず食糧問題から解決するために計画を立て、医療班は負傷者を一か所に集め治療を開始している。

「とりあえずはこんな感じでもいいかな」

「何から何までありがたいがどうございます。この恩は忘れません！」

「また攻められたら技術班と医療班のメイドたちが排除してくれるから。でも頼りすぎはダメだから戦い方を教わるといいよ」

「わかりました」

私は技術班と医療班のメイドたちに後のことを任せ、エリモスの人たちに見送られ門ゲイトをくぐり家へと帰った。

少女、玄界に行く… はず

私がエリモスから帰ると、お母さんにいきなり呼び出しを受けた。

「行きたくないよ…。」

行ってみないとわかりませんよ

「ご愁傷さまです」

「アモン先輩、本音と建て前が逆ですよ」

「あれ？でも私の直感が怒られると囁いてこない…。」

私のサイドエフェクトは「直感」

能力も名前通り、本能的になにが起きるのかがわかる。

だけど、わかるのは私自身のことだけでほかの人のことなんかはわからない。

まあ、そんなもんだらう。

私はしぶしぶお母さんの部屋に行くことにした。

部屋のほうに一歩ずつ歩くとたびに、気持ちが沈んでいく。

怒られるわけではないはわかってはいるが、わざわざ地雷原に自ら突っ込んでいくような感じは何なんだろう。

とても嫌な予感がする。

「入りたくない」

結局、いろいろ考えているうちにお母さんの部屋の前までたどり着いてしまった。

いつもなら、特に何も思わない龍の襖が今日に限って重^{プレッシャー}圧をかけてくる。

「お母さん、入るよ？」

「ええよ。入ってきんさい」

意を決して部屋に入る。

お母さんは爪をいじっており、特に怒っているような様子はない。だが私は知っている。

お母さんは爪をいじっているときは、ろくなお願い事をしないとゆうことを…。

「災花、とりあえずお疲れ様やねえ。先客がおったようやけど自分なりに考えて行動できたのは偉かったね」

「怒らないの…?」

「自分のやりたいことをやったんやろ?褒めはしても怒りはせんよ」

私は安堵で、腰が抜けた。

畳にへたり込んでみると、お母さんは惑星軌道予測装置を押し入れから取り出し私に見せてきた。

「運のええ事に近々もう一個惑星国家が近づいてくるんよ。確か名前が… 玄界^{ミデン}やね」

「え、でも玄界は次女の崩花お姉ちゃんが行ってるよ?」

「そうやつけ?まあええよ。行ってきんさい」

「休みがないー!」

「まあ来るまでにまだ三日間はあるからゆつくり休んでてええよ」

「じゃあ行くよ」

私は三日間の休日と引き換えに玄界^{ミデン}に行く決意をした。

我ながら安い対価だと思うが、お母さんのいうことだから何か意味があるはず!

私は勝手にそう思いながら部屋を出た。

母 side

うちは嬉しそうに部屋を出て行った娘を見て何か伝え忘れたことがあったと思ったがすぐに思い出せないで思い出すことをやめた。

ぶつちやけ今回、災花を玄界^{ミデン}に行かせる理由もさらに強くなつてもらいたいからである。

「先に介入してた国家が国家やし、面倒なことになるのは100%決まっとる。うちの娘はどう対処するのか見ものやねえ」

娘が処分した敵はうちが数十年前に壊滅寸前まで追い込んだ軍事国家タイラント。

うちへの恨みはまだあるのか知らんが、子供らを狙うのは予測出来る。

「これからが楽しみで仕方ないわあ。フッフ」

この笑った声が廊下まで漏れており近くを通ったメイドたちが何か間違いを犯したと勘違いし泣きながら先輩たちに助けを求めたのは秘話である。

休日一日目

この日はとりあえず疲労を抜くために、家の外の露天風呂に朝から入りに行った。

驚いたのはメイドたちが大量に居たことだ。

みんな急いで出ていこうとしたが、引き留め親睦を深める意味でも一緒に入った。

恋バナや髪の手入れを教えてもらい、「これが夢のガールズトーク！」と心の中で興奮していた。

途中からアモンとアスタロトが入ってきた、「次からは誘ってください」と言われたので誘おうと思う。

風呂の後は、コーヒー牛乳を一気飲みした。

アスタロトが出てくるのが遅いので見に行ったら頭から逆さに露天風呂に刺さっていた。

まるで犬〇家のようなだった。

「ちゃんと剃ってるんだ…。」

どことは言わないがまじまじ見ていたらほかのメイドたちに「気にしない気にしない」と言われながら露天風呂から連れ出された。

二日目

私が生まれた場所に行ってみた。

手術室で指揮を執っていた人を見つけ、会いに行ってみた。

あの時はうつすらとしか見えていなかったが、見た目は若い。

風貌からしても研究員の見本のような格好だ。

ヨレヨレになった白衣、ぼさぼさの髪、これは女の人としてどうなんでしょう。

「その節はお世話になりました」

「ああ異常個体イレギュラーじゃないか。どうしたんだい？こんな辺鄙なところ

にきて」

「私は炎花つていうんです。ずっと興味があっただけけど来る機会がなかったから今日来ました」

「興味があることはいいいことだ。軽く説明するところはトリオン技術の開発と製造部門だ」

「トリオン兵でも作ってるんですか？」

「あんな機能美のない糞以下の存在なんて作るわけないでしょ。何をやるにしても自分の手でしないとやりがないでしょ」

「え、じゃあ何を作ってるの？」

「主にトリガー関連だね。黒トリガーは大量にあるがなじまない子がたまにいるからノーマルなトリガーを作ったりしている。もちろん要望は言ってくれば出来るだけ適える」

「ということはあのメツセンジャートリガーも？」

「あれは結構前に作った骨董品だよ。まだあつたんだね」

あれが骨董品というとは中々すごい。

お土産として、骨董品のメツセンジャートリガーを3つほどもらっておいた。

「新しいのが欲しくなったらいつでもいいな。それと整備も任せな」

「いろいろありがとうございます」

「使われないより使ってもらったほうが助かるんだよ」

「在庫処分的な？」

「いや、せっかく作ったのに使われないなんて可哀想だろう？」

この人は口では骨董品などと言ってるけど、すべてのトリガーに等しく愛を注いでいるんだろう。

「そういえば、名前教えてください」

「私の名？私はザガンつていうんだよ」

「なんか男っぽいですね。よく言われるよ」

ザガンはハハハと笑いながら研究室の奥に消えていった。

三日目

この日は明日のための準備に使った。

服なども持つていくと考えると相当な荷物になってしまう。

この問題を解決するために、朝からザガンのもとに相談に行った。

「収納用のトリガーを作れるかだつて？」

「明日出発なんですけどどうにかありませんか？」

ザガンは少々考えた後、夕方にもたれてくれといった。

夕方まではまだまだ時間ががあるので、とりあえずお母さんのもとに遊びに行くことにする。

「お母さん、遊びに来たよ？」

「よう来たねえ。何して遊ぶん？蹴鞠するん？」

「するー！」

蹴鞠はお母さんといつも一緒にする遊びで、ルールは先に落としたほうの負けというシンプルなものである。

100を超えたら球を1個ずつ追加していくというルールが最近できた。

「今日は負けないよー！」

「いつまでも付き合つてあげるから張り合いや」

蹴鞠をしながらいつも私はお母さんと話をする。

雑談からお母さんのことや私のこと。

たまに歌に合わせて蹴りあう。

まる たけ えびす に おし おいけ あね さん ろつかく
たこ にしき し あや ぶつ たか まつ まん ごじょう
せきだ ちゃらちやら うおのたな ろくじょう しち(ひっ)ちよ
うとおりすぎ はちじょう(はつちよう こえれば どうじみちく
じようおおじでとどめさす

「あー！」

「今日も災花ちゃんの負けやねえ」

考え事をしていたら、私は球を1個落とし私の負けとなった。

気づけば、もう日が傾き始めてる。

庭先に植えてある枝垂桜に夕日の赤色が重なり合つてとてもきれいだ。

「お母さん！私が帰ったらまたやってくれる？」

「いつでもやってあげるから強うなつてき？」

「約束だよ！」

私はザガンのところまで走っていく。

しかし研究室にザガンはおらず、研究員の一人が私に近づき私にネツクレスを渡してきた。

「所長は疲労のためお休み中です」

「あー… なんかごめん」

「いいんです。所長も最近休んでいなかったのでもいい機会です」

確かに休まなそうないメージあつたけど本当に休んでなかったんだ。

私はネツクレスを受け取り、部屋に急いで戻った。

すでにアモンとアスタロトが荷物をまとめてくれていたので、もらったばかりの収納型トリガーをアモンに渡し荷物を仕舞ってもらった。

出発日当日

いつもより早く目が覚めた… 食堂で

昨日の夜、メイドたちがパーティーを開いてくれたのは覚えてい

る。周りを見ると、酔いつぶれたメイドたちが辺りに転がっていて死屍累々の状態だ。

「ちよっ！みんな起きて！片付けないとお母さんに怒られるよ！」

私が焦ったように起こし始めると、怒られるのワードに反応して起き始めた。

みんな怒られるのは嫌なのだろう。

その後は急いで片付け、いろいろとチェックをしていたら出発は昼を回っていた。

「ほんならいつてらっしやい。気を付けるんよ？気が向いたら行くかもしれんからね」

「気を付ける… よ？え？来れるの?!」

私が質問した瞬間、足元に門ゲートが開き重力に従って私はアモンとアスタロトと一緒に落ちた。

少女、玄界に降り立ち一騒動

拝啓お母様。そちらはとても暑く、メイドたちも夏バテしていました。かくいう私も冷房の効いた部屋から出たくはありませんでした。しかし私は今、暑いほうがマシだと思えるほど寒い場所にいます。どこだと思えますか？

「いきなり上空に転送するのはやめてよおおおおお！」
現在私たちは雲より上から落ちてます。

とにかく寒い！身体を見てみると徐々に指先がパキパキと音をたてながら凍り始めていた。

「だいたいマイナス50くらいでしょうか。結構肌寒いですね」
「先輩ちよつと冷静すぎませんか?!私寒すぎて・・・へくしょん!死にそうなんですけど!」

アモンとアスタロトはいつもどおりの平常運転だ。

特にアモンは平常ぶりがいつも通り過ぎて逆に頭のネジがいくつか飛んでるように思える。

「これからどうしますか?このままでは地面に激突して真っ赤な花が咲きますよ?」

「先輩それはシャレにならないですつて!」

「とりあえず全員トリガーを起動してそれからアスタロトのトリガーに乗ってゆっくり降りる!」

「起動!」

アスタロトがトリガーを起動させると私たちの足元にシールドが来た。

とりあえず地面に赤い花を咲かせずに済んだがまだ問題はある。

「寒い!どうにかして!」

「私のトリガーじゃ落下速度は軽減できても寒さまでは軽減できないですよ!」

「これだからアスタロトは使えないんですよ。お嬢様、一緒に抱き合えば温まりますよ!」

そういつてアモンは自身の服を脱ぎ始めた。

「ちよちよちよ！ここではだめだから！アモンが凍えちゃうから！」

「先輩！この非常時に百合なんて見たくないんですよ！」

「アスタロト…殺すぞ？」

「理不尽！」

私とアスタロトは必死になってアモンを止める。

アモンはおとなしく服を着てくれた。

すると、いつの間にか街が見え始め白く大きな建物が視界に入ってきた。

私たちが落とされたのは、日本の三門市だということは地上に降りてすぐ知ることになる。

白く大きな建物はボーダー基地だということは三門市を知ってすぐのことになるとは思っていなかった。

そして私たちは減速したまま川へと落ちた。

約3分間の出来事である。

災花たちが上空から自由落下している直後の基地内

「ん？上空に奇妙なゲート反応が出現しました」

「奇妙とはどういうことだ？」

「なんというか、通常のゲートより小さいんです。まるでドアじゃなく窓から入ってきたようにゲートが小さいんです」

「わかった。付近にいるものに周囲の確認に向かわせてくれ」

「了解しました」

忍田本部長の指示でB級隊員が3名向かうこととなった。

しかし、すでに災花たちが川に落ちた後であった。

B級隊員たちが向かう頃、災花たちは川から上がり橋の高架下で服を乾かすため各自のトリガーを起動していた。

すでにアスタロトは起動していたため寒いとかは特にないため焚火を起こさせている。

「アスタロト、これで焚火を作りなさい。訓練でやったでしょ」

「発火装置か何かないんですか?!」

アモンはアスタロトに木の板と木の棒を投げ渡し、自分の服を絞って水を絞っている。

ついでに私の服も絞ってもらった。

「あ！先輩火種ができましたよ！」

「それではそこに落ち葉でも被せて火を大きくしてください」

「今春なのにあるわけないでしょう!？」

アモンの無茶ぶりにアスタロトを見てみると哀れに感じてくる。

私は収納型トリガーを起動し、燃えそうな紙を数枚出し火をつけてあげた。

「うわーんお嬢！先輩が虐めるんですよー！」

アスタロトは私に縋り付き、日ごろからの不満を吐露した。

アモンにはもうちよつと優しくしてあげるように後で行ってあげようと思う。

「アスタロト?ちよつと話があります」

「ひっ！助けてえええ！」

アモンはアスタロトの頭を掴み柱の陰に引きずっていった。

バキッ！ゴキッ！ゴッ！ゴッ！ドゴゴゴゴ！

柱の陰から何か鈍い音がしているが絶対に見に行きたくない。

音が鳴りやむまで私は自分の服を乾かすことに専念した。

その後、アモンがアスタロトを引きずって戻ってきたときにはアスタロトは白目を剥いていた。

トリオン体同士のため衝撃がフィードバックし何度も殴られたのだろう。

「すみませんお嬢様、虫がついていましたので処ぶ…退治しました」

「あ、うん。ありがとう」

相変わずアモンは平常運転。

「本当にこの辺りにゲートの反応があったのか？」

「司令部からの情報じゃこのあたりだ」

「せっかくの休みなのにな」

男数名の声が聞こえてきた。

その瞬間のアモンの行動はとても速かった。

瞬時に焚火を消し、ダウン中のアスタロトを橋の鉄筋部分に投げ置き瞬く間に私たちの痕跡をほとんど消した。

かくいう私はアモンの脇に抱えられ鉄筋部分に隠れた。

「お嬢様、どうされますか？今後の為というならここで処分したほうが賢明かと」

「私のトリガーじゃ2人までしか倒せない。1人お願いするね。アスタロトはアモンのおかげでしばらく起きそうにないし」

「申し訳ありません。もう少し手加減していれば……」

そんなことを話しているうちに高架下に同じ服を着、武器らしきものを持った男たちが来た。

右から順にA、B、C、と仮定し、Aは拳銃を持ちBは手ぶら、Cは刀らしきものを持っている。

作戦としては、このまま私たちの下まで歩いてきたと同時に攻撃を仕掛ける。

顔を見られないように3人同時に倒し、さらに本体が出現したと同時に再度攻撃を仕掛け仕留める。

私の使用するトリガーは「白桜」「黒桜」

アモンの使用するトリガーは「炸裂鎖」

マザーの解説コーナー（ここでは鍵括弧を使いません）

唐突に任されたんやけど、まあうちも暇やさかい解説するわ。

アモンの「炸裂鎖」は使用者のトリオンを鎖に変え使用するトリガーで名前の通り任意の位置やタイミングで爆発する鎖である。

ちなみに触れても爆発するから注意しましょう。

このトリガーのいやらしいところは、鎖とっておきながら実は小

さなトリオンの糸が何重にも束ねられて鎖の形をしており、使用者の手腕1つで鎖から糸になつたり糸から鎖にしたりと厨二臭いトリガーだ。

普段は使用者の周りを浮遊しており、無限に跳弾していく。

鎖の先端には釣り針のように返しがついており、刺さった場合引き寄せることもできるから結構汎用性の高いトリガーです。ちなみに糸して攻撃をする場合対象を切断可能なので気を付けましょう。

ふう、まあこんなところやね。

え？ファンタジー臭い？そんなんうちに言われても知らん。作者に言いや

以上で解説は終了するで？必殺仕事人がそろそろ始まる時間やさかい。

標準語で喋るのもしんどいわ。

マザーの解説コー

ナー Fin

「特に異常はないな」

「それじゃさっさと戻ってゲームの続きでもしますかね」

「だな」

私たちが攻撃を仕掛ける前に男3人は踵を返し、帰り始めた。

しかしここで逃がすのはもったいない。

なぜならこの星の戦闘員にどのくらいの力があるのかを掴むいい機会だからだ。

男たちは前に2人後ろに1人というフォーメーションで高架下を出ようとしている。

後ろのBをアモンに任せ、私はBを排除した後、頭上からA、Cを捕まえ「変化炸裂弾」と「圧壊」を発動すればいい。

アモンは後ろを歩くBの首に細い糸にした「炸裂鎖」を徐々に首に巻き付くように操作していく。

そしてアモンが素早く糸を引くと...

「それでよくってどうした？さつきから話に入ってこないけ…
なっ！」

「お前なんでトリオン体から生身に戻ってるんだよ！」

Bは再度「炸裂鎖」が鎖の状態で巻き付き鉄筋の上へと連れ去られた。

AとCが気を取られているうちに私は2人の後ろに飛び降り、2人を白桜黒桜で掴み持ち上げる。

「くそっ！なんだこれ！」

「誰かは知らないが今すぐ離せ！」

「コラフストマホーク
「圧壊変化炸裂弾」

「ベイルアウト
「緊急脱出!!」

私がキーワードを言うと同時に2人は叫び、するとB同様に光となつて大きな建物の方角へ飛んで行つた。

まさか逃げられるとは思っていなかったため多少驚きはしたが、どこに逃げかを追跡するのは後でもいい。

「逃げられたね」

「多分遠隔操作か、本体が別の場所にいるかですね」

「とりあえず今は…」

「捕虜の尋問ですね」

「お前ら近界民だな！貴様らに話すことなど何もない！」

私とアモンがBを見ると反抗する姿勢を見せた。
しかしそんなことは逆効果である。

相手が抵抗する姿勢を見せればそれをへし折り再起不能にするこ
とで定評のあるアモンにそんなことをしても自白する時間が早まる
だけだ。

それから約15分後、私たちはこの世界のたまかな情報を手に入れ
た。

もちろん捕虜は記憶を消して開放しておいた。